令和 6 年 6 月 17 日
ふちえ幼稚園

令和 5 年度 学校評価報告書

本園の教育目標

1. 健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること。
2. 集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。
3. 身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。
4. 日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。
5. 音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと。

本年度重点的に取り組む目標・計画

- 子どもたちが心身ともに健康に育つようにする。
- 幼稚園の教育の質を向上させるために体育指導と音楽指導を実施する。

本年度重点的に取り組む目標の達成状況（自己評価）

評価項目の達成及び取り組み状況

#	評価項目	評価*	取り組み状況
1	様々な運動を取り入れて、体力の向上に努める。	A	● 担任は園児の運動能力に関する課題を認識し、他の教員や体育指導の講師と協力しながら、園児が楽しめるように工夫し、課題解決に繋がるような運動活動を保育に取り入れた。 ● 担任は、園児の個々の発達状況に合わせて働きかけを工夫した。 ● 年長組と年中組では、持久走を園庭で定期的に実施し、園児の体力が向上した。 ● 年中組では、手押し車や跳び箱等の体育指導の活動とリトミックの活動を日々の保育に取り入れ、園児が運動をより楽しめるようになった。 ● 年少組では、鬼ごっこ等の遊びを保育に取り入れ、遊びの中で園児は楽しみながらたくさん運動し、園

			児の体力が向上した。 ● ２歳児クラスでは、マットやフラフープを使った遊びを取り入れ、園児は普段使用しない道具を使った運動を楽しんだ。
2	園児一人一人と言葉を交わし、人と関わる力を高めるようにする。	A	● 教職員は人と関わるうえで重要な園児のコミュニケーション能力が向上するように努めた。 ● 教職員は積極的に園児に声を掛けて、園児と関わる機会が増えるように努めた。 ● 教職員が積極的に園児に挨拶したことで、園児にも挨拶の習慣が広がり、挨拶をきっかけに園児が人と関わる機会が増えた。 ● 園児数が多い学級では、担任が園児一人一人と言葉を交わす頻度が少なくなるため、より積極的に園児と言葉を交わした。 ● 年中組と年少組では、園児が絵本コーナーで絵本を選んで読んだり、担任が図書館から絵本を借りてきて読み聞かせたりした。園児が意欲的に絵本に関わるようになり、園児の言語能力が向上した。 ● 年中組では、月刊絵本「場面に応じた言い方」を用いて担任と園児が言い方について考える時間を保育に設けた。相手への言い方を学ぶことで、園児は相手に言いたい内容を適切な言葉で伝えられるようになった。
3	双方の思いや考えを伝え、他者への思いやりが育つようにする。	A	● 園児が自信を持って話せるように担任が働きかけたり、園児同士で会話するきっかけを作ったりしたことで、園児は自分の気持ちや考えを伝えることに意欲的になったり、相手の考えを理解しようとするようになったりした。 ● 園児は担任の指導によって相手の気持ちや考えを考えてから発言するようになったことで、相手のことに気を配りながら、自身の考えと気持ちを適切な言葉で伝えられるようになった。 ● 年長組では、当番活動を担当した園児の活動結果に関して、他の園児が良い点を発表する時間を保育に取り入れた。園児は他の園児に興味を持って接するようになり、お互いに良い点を探すようになった。その結果、他の園児に親しみを持つようになり、思

			いやりの気持ちが高まった。 ● 年中組では、園児の喧嘩の解決として話し合う時間を担任が設けて、園児はお互いに気持ちや考えを伝え合うようになった。相手の気持ちや考えを理解したことで、園児は相手の立場に立って自分の行動を考えられるようになった。 ● 年中組では、園児が苦手なことに挑戦したとき、担任が盛大に褒めることで、他の園児も挑戦した園児を褒めるようになった。その結果、園児は他の園児の挑戦を認めるようになり、応援したり助けたりするようになった。 ● 年少組では、気持ちを伝えることを題材にした音楽を用いて、園児が楽しみながら気持ちと考えの伝え方を習得できるように担任は工夫した。 ● 年少組では、園児が様々なことを発表する時間を保育に取り入れたことで、園児は話す前に内容を考えるようになり、自分の気持ちや考えを適切に伝えられるようになった。 ● ２歳児クラスでは、園児の言語能力が未発達であり言葉だけで園児に伝えることが難しいため、園児にとって理解しやすい指人形やペープサート等を担任は利用した。
4	体育指導を通して、身体の調和のとれた動き、バランス、リズムを体で感じ、身体を動かすことが楽しくなるように、運動が好きになるように専任の講師が指導し、園児の体育の推進を図る。	A	● 年長組は年間２９回、年中組は１５回、年少組は８回の専任の講師による体育指導を実施した。 ● 体育指導の活動や普段の保育等の園児の様子を基に、各回に担任と講師が意見を交わし、指導方法に反映した。 ● 鉄棒や縄跳び等の体育指導中の活動を普段の保育に取り入れることで、園児は意欲的に運動に取り組むようになり、運動能力が向上した。 ● 年度初めに講師の研修を受講することで、教員は指導内容について理解を深めた。 ● 年長組の園児は様々な組体操の形を一人または複数人で行い、運動会に向けて３ヶ月の練習に取り組んだ。形の練習をとおして、園児の身体の操作能力と筋力が向上した。また、園児は他者と協力して運動する楽しさに気づくようになった。

			● 年長組と年中組では、担任が園児の運動の目標を設定し、達成毎にシールを貼る等、達成度合いを視覚的にわかりやすくすることで、運動への意欲を高めた。 ● 年少組では、園児が普段の生活で使わない動作を、担任が楽しめるように工夫して運動に取り入れた。園児は楽しみながら意欲的に運動して、身体能力が向上した。
5	音楽指導を通して、歌を歌ったり、リトミックを行ったり、メロディオン等の楽器を演奏したりする。専任の講師が指導することで、音楽により興味を持ち、より楽しめるようにする。また、音楽を通して表現する力を養う。	A	● 年長組は年間１３回、年中組は１０回、専任の講師による音楽指導を実施した。 ● 音楽指導の活動や普段の保育等で行われる音楽活動等を基に、各回に担任と講師が意見を交わし、指導方法に反映した。 ● 年度初めに講師の研修を教員が受講することで、指導内容について理解を深めた。講師の園児への働きかけを日常の保育に取り入れた。 ● 音楽指導で行った歌やリトミック、メロディオン演奏等を担任が普段の保育で実施することで、園児は音楽により親しみを持ち、楽しめるようになった。 ● 年中組では、三学期のメロディオン演奏の指導回数が少なく、三学期中園児の演奏への意欲が薄れていった。普段の保育や自由活動のときにメロディオンを演奏する機会を担任が増やしたことによって、園児の演奏への興味が維持された。また、演奏に関する目標を設定したことで、園児は演奏により意欲的に取り組んだ。

* 評価（A:充分に成果があった　B:成果があった　C:少し成果があった　D:成果がなかった）

総合的な評価結果

評価：　充分に成果があった。
理由：　本年度の重点的な目標の達成の判断基準である 5 つの評価項目において、概ね「A: 充分に成果があった」の評価を得られたことから、総合的に充分に成果があったといえる。

目標の達成に向けて教職員が様々な工夫を日々の活動に取り入れたことが、達成に繋がり、また幼稚園全体における保育の質の向上に繋がった。

自己評価を実施していく中で、教職員は日々の保育における困り事や園児・学級の様子、解決に向けた工夫等を話して共有し合った。他の教職員による様々な工夫はとても興味深いものであり、新たな学びをもたらした。教職員が話して共有し合う機会は幼稚園にとって重要であり、より頻度を増やしていきたい。(園長)

次年度重点的に取り組む目標

#	目標	達成のための取り組み/評価項目
1	子どもたちの体幹が強くなる。	● 園児の身体能力が向上するように、園児が意欲的に参加できる運動量の多い遊びを導入する。 ● 体幹の安定性を高められる動作を遊びに導入する。 ● 座っている時や立っている時に正しい姿勢を維持できるようになる。
2	子どもたちが身近な自然や季節に興味を持ち、自身を取り巻く自然に関心を持つようになる。	● 農園の作物や草木、虫に園児が興味を持てるように農園を探索する頻度を増やす。 ● 花壇の草花や園庭の樹木等、幼稚園の自然環境に園児が興味を持つような活動を導入する。 ● 自然の観察や教材の利用、遊びを通して、季節毎の自然の変化に関して園児が理解と興味を深める。
3	子どもたちが思いやりの心を持ち、人と関わる力を身につけるようになる。	● 園児が他者と関わるきっかけとなる挨拶を意欲的に行えるように、教職員が率先して園児に挨拶を行う。 ● 園児が年齢の低い子を世話したり、気遣ったりして、相手から感謝されたり好意を向けられたりすることで、思いやりの良さに気づけるように、異年齢の園児たちと交流する時間を設ける。 ● 園児が人以外の動植物にも思いやりの気持ちを抱けるように、園児が植物や飼育動物に接する機会を作る。 ● 感情表現や思いやりをテーマにして、担任が絵本を読み聞かせたり、説明の時間を保育中に設けたりするなどして、園児が感情表現と思いやりを学ぶ機会を作る。

令和６年６月17日
ふちえ幼稚園

学校関係者評価委員会の評価

- 体育指導のみならず、日常の遊びの中で、たくさんの運動を取り入れていて、子どもたちの運動能力の向上を感じる。各運動項目の達成度合いを表にすることによって、友だちと一緒に練習し合ったり、競争し合ったりしてより運動に対する意欲が高まった。
- 縄跳びは、縄を回して飛ぶ感覚をつかむのに時間がかかる子どもがいるので、年中組から少しずつ始めた方がよいのではないか。
- 教職員は受け持ちの子ども以外の子どもとも関わりを持つように努めている。全教員がすべての子どもの名前を覚えているのは、日常において子ども一人一人との繋がりを持っていることの証しだと思われる。
- 子ども同士の関わりでは、思いや考えの行き違いから言い合いになったりすることがある。その様な場合にも、教員はそれぞれがどのような思いや考えであったのかを聞き出し、お互いにどのようにしたらよかったのかを問い掛け、子どもに考えさせるようにしている。園児一人一人に丁寧に関わっている。
- 音楽は専門的なところがあるので、家庭で保護者が教えてあげることが難しい分野である。子どもが家に帰ってからもよく歌を歌っていたり、鍵盤ハーモニカを持ち帰った時は、自ら弾いて保護者に聞かせたりしている。小学校に入学しても自信を持って取り組んでいる。